



百谷エンと
唄われた姫

試し読み版

第一章 ハーフエルフの家出

第二章 祭りの夜、泉の誓い

第三章 旅立つエルフとお姫様

第四章 ハーフエルフとお姫様に隠された秘密

第五章 聖なる泉に切なる願いを

エピローグ エルフと姫の婚姻旅

登場人物紹介

アルフェレス

王都の第一王女。金色の髪に、勝ち気そうな碧色の瞳をもつ。



レム

エルフの里で「始まりの樹」の見張り番を任せられるハーフエルフの少女。



くなっているのが、はっきり分かるわよお」

「ち、ちくび!!」

お姫様が口にするとは思えない言葉に驚き、声が裏返る。ただ彼女の言う通り、レムの先端は硬くなっていた。軽く張って、痛いほど。彼女にそこを転がされると、甘い痺れが全身に広がっていく。

混乱した。戸惑った。彼女の豹変よりも、自分の身体に。性の知識はあっても、実践的な事は何も知らない。彼女が施しているのが愛撫であるのは分かっても、そこから生じる感覚は初めて。どう対処すればいいのかなんて、分かるはずがない。

「やだ、助け……あんっ」

また首筋を舐められた。そこがこんなに敏感だなんて知らない。漏れる声も、さっきの彼女の悶えに近づいて、それが堪らなく恥ずかしい。羞恥に身を硬くしていると、アルフレスが耳に息を吹きかけてきた。

「じつとしてなさあい。うーんと、気持ちよくしてあげるからあ」

「き、気持ちいい……?」

彼女の吐息が、甘い。意識が朦朧としてくる。そういえば、見ず知らず同然の同性に胸を触られているのに、戸惑いこそあれ不快な感じを覚えない。

「そうよお。女の子の身体は、どこでも気持ちよくなれるの……」

うっとりとした囁きが耳をくすぐり、レムの意識を朦朧とさせる。彼女の濡れた瞳に掬

め捕られたように、視線を逸らす事ができない。そのつもりはないのに、じっと見つめあってしまう。それだけで正体不明の痺れが甘い熱を帯び、心地よく感じ始めてしまう。

(……しつかりしなさい！ これは、この娘の魔術……)

完全に術中に嵌まってしまう前に逃げなくては。そう思っているのに、やっぱり身体は動かなかった。まるで、レムの意思に逆らい、彼女の指や舌から離れるのを惜しんでいるかのようだ。それを見透かしたかのように、不躰な指が脚の間に滑り込んだ。

「ふあッ!!」

「こっちはちゃんと下着を穿いているのね。でも……あは、もう湿ってるじゃなあい」

「え、湿って……なに？」

下着の中心を指先で撫で上げ、アルフェレスが嘲るように目を細める。秘部を触られた羞恥で、彼女の言葉の意味を考えられない。でも、その指が布地の内側に侵入し、くちゅりと音を立てた時、姫の濡れた女性器が、瞬くような眩しさで瞼の裏に甦る。

(わたしの……いま、あんな風になっているの?)

自分のなんて見た事ないから、想像できない。しかしどの道、考える余裕なんてなかった。彼女の指が秘裂をひと撫でただけで、強烈な痺れが一気に頭を突き抜ける。

「ひあああああッ!?!」

甲高い悲鳴が迸った。まるで嵐に巻き込まれたように、ふわりと背中が浮き上がる。

「な……何、いまの……」

「んふっ。ここ触ると、とーっても気持ちいいでしょう。ほら……ほらあ」

「あん、やめてよ！ うっ、くっ……んぐ……！」

アルフェレスが、恥裂の溝に沿って指を小刻みに上下させると、再び甘い痺れが脳天を貫いた。無数の手に肌を撫で回されているみたいだ。背中が何度も跳ね上がる。彼女が触れているのは、指先のみ。小さな一点にすぎないのに、そこだけで身体が操られているみたいに激しく悶えさせられる。どんなに暴れても、彼女の指が離れない。むしろレムの方から押しつけるかのように、腰を上下に波打たせてしまう。

「やだ……どうしてこんな……あああう！」

どうして身体が勝手に動いてしまうんだろう。わけが分からなくなつて、首を左右に振り立てる事しかできない。

「あ、あ……あ、あんっ！」

断続的に声が漏れる。それを自分で止められない。彼女は、そんなレムのワンピースの襟に手をかけ一気に引き下ろした。

「きゃ……!?」

しかも、いきなり乳首に吸いついてきた。まともに悲鳴を上げる暇もない。

「ふあああああつ!!」

乳房を見られた恥ずかしさに身体が竦む。しかし次の瞬間には、彼女の舌に口腔内で硬直乳蕾を弾かれ、先端どころか胸の膨らみがビリビリ痺れた。と同時に、その衝撃が伝播

した股間で異常が起きた。内腿を液体が零れ落ちる。失禁かと思っただけ、それとはまったく別物の、温かくてトロリとした初めての感覚。

「あはあ。すつごく濡れてきたあ。気持ちいいのね？ ん、ちゅ、ちゅぱっ」

「む、胸そんなに吸わないで……！ お股、掻き回さないでえ!!」

レムの懇願を嘲笑うように、アルフェレスは乳首を激しく吸引した。股間も抉るように指で円を描き、ちゅばちゅば、くちゅくちゅと、レムの身体で粘着音を奏でる。それが堪らなく恥ずかしい。だったら彼女を突き飛ばしてしまえばいいのに、もっと責めて欲しいがつているかのように、乳房を突き出してしまおう。

「な、なんで……身体、こんなに熱く……あ……っ」

「んふ、いい顔になってきた……」

思考が壊れたような笑みを湛え、姫が見下ろしてきた。その口元から唾液が一筋、糸を引いて滴り落ちる。唇に触れたそれを、レムは無意識に舐め取った。

「あ……？ あ、あっ……はあああっ!!」

一瞬の静寂の後、レムの口から悲鳴が溢れた。身体の中を熱風が暴れる。それまでとは比べ物にならない熱さに淫裂が苛まれ、身悶えせずにいられない。救いを求めるように無我夢中でアルフェレスを掻き抱き、彼女の指に掻き回して欲しくて自ら大きく脚を開く。

（わ、わたし……何やってるのお？）

絶対におかしい。普通でない事が起こっている。そうと分かっているながら、この感覚に

逆らえない。顎から頬にかけて舌で逆撫でされて、ビリビリとした痺れに酔い痴れる。

「ほら言っただらんなさい。気持ちいいって。そうしたら、もっと楽しくなるわ」

「き、気持ち……あ、あん……あああんッ！」

彼女は自分で要求しておきながら、それを遮るように淫裂を掻き回した。それも今までのように全体を撫でるのではなく、ある一点に攻撃が集中する。

「ひっ!! なにこれ、なにこれ………ひいいい!!」

性器の先端、コリコリとした小さな豆を転がされた。全身がバラバラになりそのような衝撃に、手足の先まで硬直する。

「ひっ! やめて怖い……ひあ、ひ、ひ!!」

「ここ、女の子が一番気持ちよくなれる部分よ。安心して感じなさい」

「そ、そんな事言われても……ひっ、ひっ……いやあああっ!!」

そんな部位の存在すら知らなかったレムに抵抗する手段はない。身体の内側で何か膨張する。煮えたぎったものが破裂しそうな恐怖に怯えて、姫の肩にしがみつく。

「なにか……来る! どうにかなっちゃう……!!」

「ああすごい……もうすぐなのね? イッチャうのね!!」

「イク? イクってなに……ふあ? あ……あ!」

目を見開いたアルフェレスが汗まみれで指を動かす。レムの敏感な肉芽を素早く擦る。不意に、身体がふわりと浮きそうになった。視界も真っ白になって、本当にどこかへ意識

が飛んでいきそうになる。あと少しで、どうにかなってしまいそうな予感に襲われる。

「や……やあああん！ 私も気持ちよくなりたい!!」

なのに、悶えるレムを見て自分が我慢できなくなったのか、彼女は急に愛撫をやめてしまった。そしてドレスをたくし上げ、顔の上に跨ってくる。

「ずるい！ 私が先にしてたのに、どうしてあなたを感じさせなきゃいけないの!? 私を先に気持ちよくして！」

今にも泣き出しそうに、もどかしげな表情でレムを責める。そっちが襲いかかってきたくせに——なんて怒りは湧かなかった。頬を挟む太腿の滑らかさに鼓動が高鳴る。まるで口づけを待つような、薄く口を開く姫の女性器に視線は釘付け。唾液のように垂れる粘液は内腿まで濡らし、鼻孔を襲う甘酸っぱい匂いと淫猥な熱気に目眩を起こす。焦点が合わない目をしっかりと見開いて、無意識のうちに生唾で喉を鳴らす。

「舐めて！ 私のここ……早く……。そしたらもつと気持ちよくして……ふあああっ!!」
その条件を聞く前に、レムは喘ぎながら彼女の淫裂にかぶりついていた。淫靡な匂いに酔って躊躇すら覚えない。柔らかな肉壁と熱い蜜を、舐るように舌に絡める。

「そう！ そう、それ……気持ちいい！」

彼女の声に励まされ、レムは必死に舌と唇を動かした。何も教わっていないのに、まるで本能で知っているように、尖らせた舌先で奥へ奥へと掻き分ける。

「はあああ……っ！」

姫の喘ぎにレムまで溶かされそうだ。無意識に自分の股間に手を伸ばし、半端に放り出された性器を慰める。

「あん、いい……いいわ、あなた上手……うん！」

そんなものが上手くても、嬉しくもなんともない。冷静な時なら、そう思っていただろう。でも今は褒められた事に心が躍って舌を動かす。甘酸っぱい淫液の味と匂いを胸いっぱい吸い込みながら淫褻を舐め回すと、彼女のお尻が派手に跳ねた。そこが感じるのと呆けた頭で理解して、重点的に責め立てる。

「ああいい……いい……イク、イク……イッちゃいそう……！」

「待って、わたしも……！」

アルフェレスが、どこかに行きそうになっている。レムは慌てて後を追った。再びあの身体が浮きそうな感覚を求めて、さつき彼女に触られた淫豆を必死に擦る。

「ふあ！ これすごい……ここ、すごい！」

さつき羨みかけた浮遊感が、瞬く間に勢いを取り戻す。驚きと歓喜に沸き立ちながら、彼女も同じようにしてあげなくてはと、恥裂を舌で掻き回す。

「ふああああ！」

アルフェレスが仰け反った。その時が近いと感じたレムは舌と指を同時に動かす。彼女にそんな施しを与える理由も義務もないはずなのに、そんな事を考える理性すら失い、口腔に流れ込む淫蜜を夢中で食る。



「レ……んむっ!!」

彼女の吐息が心地よくて、胸がいつぱいになって、気づいた時には唇を塞いでいた。初めて自分からするキスに驚きながらも、少女の唇の柔らかさに心が震え、彼女の名を呼びながら夢中で吸いつく。

「ああ……アル、アルう……」

「ん、む……レム、あ、ふ……ンッ」

まるで仕返しのように、柔らかな舌が口腔に押し入ってきた。レムも歓喜しながら迎え入れ、自らも舌を伸ばし、抱擁のように絡みつかせる。

「あ……ん……っ」

アルフェレスが小さく呻いた。その吐息の微かな振動さえ、レムの身体の中心を心地よく震わせる。脚の間に恥ずかしい疼きを感じて身体を振ると、尖り始めた乳首が彼女の乳首に擦れて鋭く痺れる。

「あんっ……レムう……」

「は……あ……アルう……」

彼女も感じてしまったらしい。潤んだ瞳でレムを見つめ、そしてさらに深く舌を挿し入れてきた。舌同士を擦りつけると、頭の中を痺れるような快感が走る。

「あ、あ……キス……舌……アルの舌、気持ちいい……」

「私も、レムの……レムのが……あっ!」

舌が動くたびに背中が震える。しっかりと抱き締め合っていないと、全身から力が抜けて泉に沈んでしまいそうだ。

「もっと……レムのの、もっとお……」

呆けたような瞳の姫様の命に従い、レムは自分の口腔にたっぷり唾液を含ませた。そして大量に溜まった粘液を、槌状に窄ませた舌で彼女の口に注ぎ込む。

「ああ……ああ……」

姫はそれを、伸ばした舌と忘我の表情で受け止めた。そして口の中で自分の唾液を混ぜ合わせ、レムの口に返してくれる。それを何度も繰り返し、どちらからともなく唇を合わせ、躍る舌で攪拌した。クチュクチュといやらしく粘った音と、二人分の唾液の匂いが、まるで発情薬に酔ったように思考を麻痺させる。

「あん、やらしい……。私、レムといやらしい事してるう……」

「いいよ、姫様……。もっと、もっといっぱい、いやらしい事しよう……」

分かってる。これは逃避だ。恐怖と悲しみを忘れるために、快感に逃げようとしている。それが何だというんだらう。自分ではどうしようもない辛さに沈むくらいなら、今くらいは、気持ちのいい事に耽っていたい。アルフェレスのためだけじゃない。レムも、彼女との快感を求めずにはいられなかった。

「はあ……はあ……ア、アル……姫様あ……」

「あ、あんっ。レムう……」

喘ぎながら、姫の乳房を揉み上げた。下乳を五指でくすぐると、彼女は背伸びするように身体を仰け反らせ、胸を好きなように触らせてくれる。彼女とは二度も淫らな事をしたけれど、そのいずれも葉で呆けていたし、こんなにまじまじと、しかも陽の光の下で裸を見るのは初めて。レムは、その美しさに息を飲んだ。

白く滑らかな肌に、片方だけでも両手で覆いきれない豊かな乳房。その頂点で薄桃色に咲く、小さな乳首。強気な彼女の本性を表すように、震えながら懸命に身を伸ばす乳蕾の愛らしさ。レムの胸に、さっきの切ない疼きが甦り、我を忘れてむしゃぶりついた。

「ひっ!! あああん!」

不意打ちで敏感な場所を含まれ、反射的にアルフェレスが逃げようとする。レムはその細い腰と肩を抱き寄せ、口の中で硬い蕾を転がした。

「あん、あん! そ、そんなコトされたら……ンふッ!」

震える手がレムの髪を掻き乱す。その反応が、無性に嬉しい。

「もつと感じさせてあげるね……。ちゅ、ちゅうううっ」

「ひふああっ!! レム……胸、おっぱい……痺れ……はう!」

思いきり吸い上げると、アルフェレスは震える指をレムの肩に食い込ませた。必死に身体を支えていたけど、膝立ちでも辛くなったのか、泉の底にお尻をついてしまう。

「あう……。はあはあ……レムう……」

レムは、荒い息で胸を弾ませる彼女の上体を、泉の縁に生い茂る草に横たえた。水中で

だらしなく開いた脚の間に自分の身体を割り込ませ、さらに激しく乳首を責める。舌の上で硬さを増す桃色蕾を、転がし、吸い上げ、歯を立てて甘噛みする。

「ひっ、ひはっ、んふあっ!!」

短くて甲高い声を上げながら姫が悶える。背中を反らせ、下草を掴んで快感に耐える。自分が愛撫を受けているわけでもないのに、彼女が感じているのを見ていただけで、レムの身体も熱くなる。左右の乳首を交互に吸い上げ、豊かな双球の間に顔を埋めて、深い谷間を逆撫でするように舐め上げる。

「はひっ、ひいッ!」

強張った彼女の脚が、レムの腰を挟んで震える。でもそこまで感じているのに、声を我慢しているせいで、さつきから喘ぎが変だ。

「ねえアル、もっといっぱい声を出していいよ。ここは誰にも見られないんでしょ?」

「で、でも………恥ずかしい……」

「初めてでもないのに、今さら何を言ってるのよ」

「お……お薬使わないのは、初めてだもん……」

アルフェレスが、口元を隠しながら視線を外す。発情薬の力を借りないと、高飛車な彼女もこんなにも愛らしく恥じらうのかと思ったら、レムの胸も否応なしに昂った。

「アルって、可愛いんだね……」

「な、何を言ってるの。私が可愛いのは当たり前……」

恥ずかしがっていても、強気なところは変わらない。生意気姫にお仕置きするように、レムは攻撃の手を下半身に伸ばした。彼女が身じろぎしても水面が揺らぐだけ。しかも油断して脚を開いているので、侵入は容易。右手の指を蠢かしながら、内腿を撫で上げる。

「ひああああ!？」

奇襲を受けたアルフェレスが甲高い声で叫んだ。反射的に脚を閉じようとしたので、慌てたレムは指先を淫裂に到達させる。そこには、清らかな泉の冷水とは明らかに異質な、温かくて滑る液体が。

「アルのここ、ぬるぬる……。おっぱい吸われて気持ちよくなっちゃった？」

「そっ、そんな事……。レムごときの愛撫で感じてなんか……」

「無理しちゃって。これ、好きなんですよ？」

彼女の肩にしっかりと腕を回し、逃げられないように固めてから、中指で秘裂を責め始める。といつても不慣れなので、繊細な女性器をどこまで撚っていいものか、力加減が分からない。薬に操られていた時のようにはいかず、割れ目を遠慮がちになぞるだけ。

「や、やああ……。そんな……。焦らすなんて、意地悪……。や、あんっ」

姫が、非難めいた目で見上げてくる。もちろん分かっている。これでは絶対に物足りない。レムはあえて誤解を解かず、意地悪を装いつつ、教えを請うた。

「どうして欲しいの？ どこを、どんな風に？」

「め……。召使いのくせに、生意気なのよお！ はあ……。はあ……。も、もつと強くして、

大丈夫だから……。ひ、ひだひだ襷を……震わせるみたいに……」

恥じらいと欲求の狭間で、アルフェレスが愛撫の仕方を教えてくれる。レムの指も次第に大胆さを覚え、陰唇を素早く振動させる。

「そう、そんな感じ……それ、そこ……そこをもつと……あつ、はうッ！」

姫の身体が跳ねた。ひととき感じる部分と直感し、そこを重点的に擦りまくる。

「う、あ……あ、あうッ」

姫の腕がレムの首に巻きついた。激しく悶えながら唇を求めてくる。快感で震える彼女に覆い被さり舌を与えると、待ちきれないようにかぶりついて唾液を吸い始めた。

「んっ、姫……ン、むふうっ！」

レムの背筋もゾクゾク痺れる。キスというより舌での愛撫だ。表面のザラザラが擦れ合うたび頭の中が白く染まる。あまりの快感で意識が奪われそうになる自分を叱咤し、必死にアルフェレスの淫裂を乗り続けた。

「あ、あ……レムすご……い、すごい……気持ち……いいっ！」

「いいよ。もつともつと感じて……わたしも……すごく……ああん……」

姫の丰满な胸の上で、レムも身体をくねらせる。乳首同士が触れ合う快感に苛まれながら、顔を何度も左右に傾ける深いキスに耽溺する。彼女の指が背中に爪を立てるけど、それすら感じてくれている証と思うと、痛みよりも喜びが勝る。

「ああレム……レム！」

息が詰まるような姫の喘ぎ。秘裂でも、陰唇の肉壁が、まるで指をしゃぶるように絡みつく。それを激しく煽るたび、熱い粘液が泉に溶け出してゆく。

「やだ……どうしようレム、私……私……はああンむっ！」

震える身体がレムにしがみつく。引き攣る脚が、バシヤバシヤと水面を蹴り上げる。もう一息だと感じ取り、陰唇を愛撫していた指をさらに一段深く押し進め、性器粘膜を直接擦った。素早い動きで膣口をなぞると、彼女の両の手足がレムに抱きつく。

「あう、あ……んぐっ、あうッ！」

この期に及んで声を堪えようとしているけれど、漏れ出す喘ぎを抑えられない。レムの唇から垂れる唾液を舐め取りながら、腰を前後に振って指を貪る。

「レム、私……イク……もう、もう……我慢できない！」

我慢なんて必要ない。レムは、とどめとばかりに髻を弾くように震わせた。たった一本の中指が与える振動で、彼女が一気に昇り詰める。

「あ、あ、イク！ イク、イク、はああうッ!!」

姫の身体が、魚のように何度も跳ねた。四肢でしがみつかれ、レムの細い身体が折れそうになる。それでも愛撫の手を緩める事なく、彼女をさらなる高みへと吹き飛ばす。

「それダメ、もうイッたから！ またイク、イッちゃう、ふあああッ!!」

陰唇が収縮してレムの指に吸いついた。あらゆる場所で快感を表す女の子の身体に驚きながら、自分の腕の中で絶頂した姫の姿に幸せな達成感を覚える。



「はあ……はあ……」

荒い呼吸の中、アルフェレスが薄く開いた目でレムを見上げる。ちよつと忘れかけていたけれど、この愛撫は快感で辛さを忘れさせるためのもの。少しは目的を達成できただろうか。急に自信がなくなつて俯くと、彼女は、いきなり両手で頬を挟んで唇を重ねてきた。「んむっ!!」

キスの不意打ちに面食らっている隙に、アルフェレスが身体を入れ替え、レムを組み伏せる格好になった。太陽が真上にあり、逆光の中で吊り上がった彼女の目は、怒っているようにも恥じらっているようにも見える。

「よ……よくも私をイカせたわね。召使いのくせに生意気な」

「えー。召使いつて……それ、まだ言うの？」

「当たり前よ！ ご、ご主人様に恥を掻かせたんだから、覚悟なさい！」

自分からも求めてきたくせにと、理不尽な怒りに戸惑う間もなく、姫様の逆襲が始まった。彼女はレムの脚を水中から持ち上げ、肩に担ぐ。

「何するの、覚悟つて……ひああッ!!」

そして、いきなり秘裂に口づけてきた。唾液をたっぷり纏った舌が、レムの割れ目をねつとりと撫で上げる。

「んふ、あなたの指使いもなかなかだったけど……私が、本当の快感というものを召使いに教育してあげるわ」

「そ、そんな……あう、あああうっ！」

舌が陰唇を掻き分け、鬢の隙間をくすぐってくる。チロチロと細やかな動きなのに、堪らない痺れが一瞬にして下半身を覆い尽くした。彼女の肩の上で膝が伸び、爪先までがピンと強張る。

「どう？ 気持ちいいでしょう」

「すご……すごい、何でもこんな……。アル、今まで誰かにこんな事……」

「そんなわけないでしょっ！ あなたとが初めてよ。く……薬の失敗作のせいで、変に詳しくなっただけっ」

むきになって否定するけど、どう詳しくなったというのか。多分、繰り返すひとり遊びの中で、色々と妄想していたんだろう。レムという相手を得て、それを実現できるのが嬉しいに違いない。そう思うと微笑ましくなり、つい姫を温かな目で見てしまう。

「何よその顔はっ！ ンもう、私を馬鹿にしたり疑ったりした罰よ。こうしてあげるっ」

彼女の舌が、淫核を弾いた。ビリビリと強烈な痺れに、レムの全身が硬直する。強すぎて逃げ腰になる。けれども下半身が宙に浮いていてはどうにもならない。

「ふああっ！ そこ駄目っ、強すぎて……ひいいいっ！」

もちろん罰なのだから、姫は許してくれない。レムの背中が浮くほど腰を持ち上げられ、股間が顔の上に来た。もはや、肩だけで身体を支えている状態。

「やああ、こんな格好恥ずかし……っ！」

凶を察するのと同時に唇が塞がれる。膝立ちになって、上向いたレムの唇に覆い被さるようにして舌を捻じ込んでくる。

「ん、アル何を……あふっ」

「言ったられしょ、ちゆ。頑張ってる、ご褒美をあげて……ん、ちゆ、ちゆるっ」

「んッ、きゅふうっ！」

掬め捕られた舌が、激しく吸引された。ゾクゾクと背筋が痺れる。引き攣る指で彼女の肩にしがみつき、快感で背中を波打たせる。

「だめ……アル、わたし……あう、ん、んッ」

どんなご褒美かは何となく想像はついていたけど、寝るつもりでいた身体にこの快感は酷だ。睡眠欲と性欲がレムの中で葛藤する。もし、ここで押し倒され、ベッドに横たわったら、あるいは眠気の方が勝っていたかもしれない。しかし彼女は、吸いついた舌で引張るように、自らをレムに押し倒させた。

「あうんっ」

キスをしたままアルフェレスの上にのし掛かる。彼女は小さく喘ぐと、レムの首を抱き寄せて、唇を捻じめるように押しつけた。

「あの、アル……？」

「んもう、察しの悪い召使いね。私の身体がご褒美。す……好きなように触るのを、許してあげます」

もしかして、さつき半端に終わった自慰の続きをしただけじゃないだろうか。退屈が過ぎて、欲求不満が暴発しているのではと苦笑する。

それでも構わなかった。だって、屋敷を出てから初めてのキスに、レムも欲情を止められなくなっていた。疲れて眠いはずなのに、身体の火照りは強まるばかり。唇の快感だけでは飽き足らず、重なる乳房を捏ねるように身体をくねらす。

「あ…………ふ…………」

乳首が擦れ合って、アルフェレスが喘ぎながら首を反らせた。その白く細い首筋に吸いつくと、震えながらレムの腕を掴んできた。

「だめ、そこ…………感じすぎて…………」

「だめじゃない。わたしの好きにしたいいい約束でしょ？ ……ちゅっ」

「はあうっ」

強く弱く吸うたびに、レムの下で白い肢体が悶えた。反射的に押し返そうとする両手を掴み、指を絡めてベッドに押しつける。そして再び唇を重ね、その口腔を舌で舐め回す。

「あ、レム…………。そ、そんなにしたら…………駄目、ンふうっ」

駄目と言いながら、アルフェレスも積極的に舌を絡めた。螺旋を描くような動きで、唾液を塗りつけてくる。舌の表面のざらざらが、ねっとり粘液で滑らかになっていく。

「わたしも、これ…………すっごく気持ちいい…………はあ、アル…………アルう…………」

レムも快感で背筋を震わせた。しかも二人して悶えるものだから、擦れ合う肌が過敏に

反応して、ヒリヒリするような快感が頭から爪先まで行き渡る。もがくアルフェレスの太腿が、レムの脚の間に入った。彼女の身じろぎで膝が上下するたびに、下着越しに恥裂を擦られ、堪らない快感が頭を直撃する。

「あふ……ふあ、あふう……っ」

今度はレムが唇を震わせ首を反らせた。気持ちよさで涎が垂れる。アルフェレスは、その粘液の糸を吸って、耳朶に塗りつけてきた。彼女よりも少し長いそれを、先端から根元まで、舌先でくすぐるように舐め回す。

「あう！ アル、それ感じすぎて……あう、あああつ！」

我慢できずに仰け反った。しかし彼女はそれを許さず、絡めていた指を振りほどいてレムの肩を抱き締めた。脚も使って全身で搦め捕ってから、改めて耳朶を舐め上げた。クチュクチュ卑猥な粘着音に、頭の中を掻き回される。

「ダメツ！ アル、それホントに……ひいいいッ！」

「あん、レムこそ駄目よ。そんなに騒いだら、他の人に聞かれてしまうじゃない」

「そ、そうだけど……ンツッ！」

自分から静かにしろと言った手前、必死になって唇を噛む。しかしこれは、そんなもので耐えられる快感じゃない。しかも彼女は脇腹までくすぐり始めた。敏感な部分を同時に責められる快感と辛さで、どうにかなってしまいたいそうさ。

「んんっ……あ、ふあつ。た、助けてアルう……！」

ついには救いを求めてしまう。しかし意地悪なお姫様は、愛撫をやめようとしな。それどころか、身体をひっくり返して上下を入れ替え、レムのお腹に跨った。

「ああ……もう堪らない……」

彼女は自分の指を舐めながら、うっとりとした目で見下ろしてきた。細い腰は柔らかくうねり、見上げる大きな乳房は圧巻。濡れた瞳に見つめられるだけで、レムの鼓動も早くなる。姫様の全身から匂い立つような色気に、胸も股間もゾクゾク疼く。この雰囲気は、彼女と初めてした時を思い起こさせる。

「アル……まさか、まだあの薬を？」

「そんな無粋なもの、使ってないわよ。レムが可愛いのがいけないの。……えいつ」
「ひあああつ!!」

両の乳首を、指先で同時に弾かれた。激しい痺れに腰が浮き、お腹の上のお姫様を跳ね飛ばす。彼女はちよつと驚いた顔をして、しかし、もつと下の方に狙いを定めた。

「レムったら、まだこんなものを穿いていたの？ はーい、脱ぎ脱ぎしましょうねー」

「あ、ちよつと……やんっ！」

姫の指が下着にかかる。恥ずかしいのに、口先でしか抵抗できない。両手で顔を覆っている間に、頼りにならない布切れは、あっさり足首を通り抜けてしまった。

「はーい。これでレムも一緒のはだかんぼー」

アルフェレスが子供みたいにキャッキヤとはしゃぐ。しかしその目は欲情にまみれ、性

欲を隠そうともしない。卑猥な色の舌で唇を舐める様は、本当に発情薬を使っていないのか疑わずにいられないほど。

(あ。もしかして、すっごく恥ずかしがってるとか)

欲求は本物だろうけど、それを露骨に表すのはお姫様としての自尊心が許さない。それならいっそ、発情薬に酔ったふりをしてしまえと、おおかた、そんなところだろう。

でも、そんな理屈なんてどうでもよかった。彼女の指が恥裂にあてがわれただけで、下半身が淡い悦びに包まれる。息を吐いて感じる準備をする前に、陰唇をくすぐられた。縦筋を擦り上げられ、甘美な痺れに内腿が強張る。無意識に脚を開いてしまう。

「はああ……ああああん」

「んふ、いい子。もっと開いてごらんなさい」

姫の囁きに操られ、レムは膝を立てて腰を浮かせた。彼女の指の動きが縦から円に変わり、陰唇の奥の粘膜を掻き回す。

「んあっ！ ひ……んンッ！」

声を出そうとして唇を噛む。臉の隙間で、アルフレスが微笑んでいる。レムを大声で喘がせてやろうと企んでいる意地悪な笑み。負けまいと思うのに、また脇腹を蠢く指でくすぐられて、お尻が跳ねる。

「あは、いっぱい濡れてきた……。ほらレム聞こえる？ あなたの音よ」

言われなくても分かっている。さつきから股間がグシヨグシヨだ。それを強調するよう

に彼女に掻き回されて、はしたない音が耳を辱める。

「あ、あん！ アル……わたしが、あなたを好きにしていって話じゃ……あぁうっ！」

「だから、こうしてレムが好きそうなところを可愛がってあげているでしょう。これも私からのご褒美よ。有難く頂戴しなさい」

「そんな……やぁあぁうん」

理屈の通らない言い分に困惑しながらも、気持ちよくしてくれるのを、どうして断れるだろうか。体内で淫熱が上昇し、浮ついた腰が円を描いて踊る。身体の隅々まで行き渡る甘美な痺れに酔い始め、震える手指がシーツを掴む。

「はっ、あっ……き、気持ちいい……アル、それ……すごく……いいっ！」

「はぁ……。感じているレム、やつぱり可愛いわ……」

快感に耐えるレムを見ながら、アルフェレスが覆い被さってきた。脇腹の手が、お腹、そして乳房へと昇ってくる。顔の上で、彼女が小さく舌を出した。それが欲しくてレムも首を伸ばす。しかし、触れる直前で、彼女はスッと上体を引いてしまう。

「私のこれ、欲しいの？」

「欲しい……欲しい」

アルフェレスが舌をひらひら見せつける。レムも懸命に舌を伸ばす。

「私とキスしたいの？」

「キス、したあい」

「いいわ、キスしましょ」

レムは歡喜に顔を綻ばせた。ちよつとばかり焦らされたけれど、やつとキスできる。なのに、彼女の唇がお腹の方まで遠ざかつてしまった。嘘を吐かれたのかと思つて上体を起こす。けれど、浮きかけた背中は、あえなくベッドに叩き落とされた。

「ヒッ、ひいつ!!」

甲高い悲鳴が迸る。アルフェレスは約束通りキスしてくれた。唇ではなく、脚の間の、もうひとつの唇に。本当の口づけのように陰唇を啄み、舌全体で舐め上げる。その動きに合わせるように、自分でも信じられないほどの甘い声が漏れる。

「ふあ……ああん」

「ん……レム、静かに。他の人に可愛い喘ぎを聞かれてしまふわ。ん、ちゅ、ちゅぷつ」

「ひいいいッ!!」

言葉とは裏腹に、彼女の舌愛撫は容赦がない。先端で鼠径部をくすぐり、唾液の跡を残しながら内腿を撫で上げ、そして再び淫唇を抉る。

「アルだめっ! き、気持ちよすぎて……声……声……声……は、あつ、あんっ!!」
手の甲を噛んだり両手で塞いだり、毛布を噛んでも効果はない。すると、アルフェレスが身体の向きをくるりと変えた。綺麗な丸みを帯びたお尻が、レムの顔の真上に来る。その光景に、目を奪われた。まるで吐息を漏らす唇のように、彼女の性器が濡れて綻んでいる。お姫様が最も秘すべき場所を間近で魅せられ、生唾を飲み込む。

アルフェレスが、チラリとレムを見た。これで口を塞げと言いたいのだろうけど、その目に淀む欲情を隠しきれていない。その証拠に、淫裂からは一筋の涎が垂れ、内腿に光る跡を残す。もつとも、そうでなくてもレムには関係なかった。

「はあ……」

前に舐めた時の感触が舌に甦る。そして思い知る。自分は、もう一度あれを味わいたかったのだと。そして待ちきれなくなつたように降ってくる淫裂を、レムも自分から迎えにいった。彼女のお尻を掴んで引き寄せ、舌を押しつける。

「はあんっ！」

キスと同時に、アルフェレスが吐息を漏らした。掴んだお尻が震えている。舌先で秘裂の襞を震わせると、とろりとした蜜が流れ込んできた。それを躊躇もなく喉に流し、吸いつくように口づけしては、さらに舌を使う。

「あ、レム……レム、それ……気持ちいい！」

アルフェレスは歓喜に声を上擦らせ、仕返しのように愛撫を再開した。膝を甘噛みし、内腿を舐め、性器に舌を突っ込んでくる。さっきのような余裕はない。とにかく舌を動かしまくりに、レムの性器襞を掻き回す。

「ひっ、あつ、アル……っ、んあ、あぶっ！」

ビリビリ痺れる快感に、腰がくねくね踊らされる。アルフェレスの舌が、それを執拗に追いかけてくる。レムも、お返しに、小刻みな舌の動きで彼女の陰唇を舐め上げた。そし

て奥へ奥へと進むうち、滑らかな性器の底に膣口の窪みを見つける。

「ひいん！」

そこを突いた途端、アルフェレスの背中が仰け反った。ここが彼女の感じるころなのだと思い、尖らせた舌先を抉り込む。

「ひッ、レムすご……そこすごい！　すごく感じて……あああう!!」

その言葉に励まされ、さらに奥へと突き進む。といっても、舌の長さはたかが知れている。せいぜい入口近くを舐め回すだけ。それでも、彼女のお尻は信じられないほど激しく痺撃した。逃げ腰になるそのお尻を必死に引き寄せ、膣口の縁を何度もなぞる。

「ひいひいッ!!」

まるで絶頂したように彼女の腰が跳ね回る。しかし姫様も負けていなかった。激しすぎる反応にレムが驚いている隙に逆襲を図る。両手で淫裂を大きく開いて、剥き出しになったレムの淫核を舌で弾いた。

「きッ……ひッ!？」

快感を通り越した、強烈な痺れに声も出ない。自分の方こそ達してしまっただのかと思うほど、足の指がピンと伸びる。アルフェレスはその反応に怯む事なく、レムの内腿に手をかけて、さらに大きく開いた。

「やだアル、恥ずかし……ンああ！」

大股開きに羞恥を感じる余裕すらない。アルフェレスの舌が淫核を包み、舐め上げ、弾



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

空想世界
エクスプローラー

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラマメイト!

小説家になるこの男性向けサイト
「アクトタインノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ
キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイズ?

あなたはどの

あとみっく文庫

呪祖喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めないエクスプローラー

フリーダム120%!?
サンプルにとらわれない
ドキドキキララへ!

エクスプローラー

二次元ぷち文庫

異世界
で生きる
妹は
イケメンか?

ドキドキキララフナ
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫